

礼拝堂と新島精神

圓月勝博

奨励者紹介〔えんげつ・かつひろ〕

同志社大学文学部教授

肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。

(ヨハネによる福音書 3章 6節)

同志社礼拝堂という由緒ある場所で、お話をさせていただく機会を与えていただき感謝しています。そこで、まず、同志社礼拝堂について、同志社人なら誰もが知っているべき基本的な事実を確認するところから、本日のメッセージを始めたいと思います。

この同志社礼拝堂は、同志社英学校創立10周年を迎えた1885年に着工し、翌1886年に竣工しました。プロテスタントの礼拝堂としては、日本最古とされており、重要文化財にも指定されています。ただし、同志社がこの建物を大切にしている理由は、単に古いからとか、重要文化財だからということではありません。この礼拝堂が同志社人にとって特別な意味を持つ理由は、同志社の原点である新島精神が宿る場所だからです。

この礼拝堂が着工した1885年12月の定礎式の式辞で、新島先生は「この礼拝堂は、わが同志社の基礎」と言っておられます。教室や図書館ではなく、礼拝堂にこそ、「同志社の基礎」があるとおっしゃった新島先生のこの言葉は、同志社教育の中心には、キリスト教主義があることを明らかにするものとして、学内では広く知られており、大学のホームページにも引用されています。しかしながら、「西洋諸国の学校」においては、教育と宗教の間に深い関係があるということを力説なさっているこれに続く文章は、それほど広く紹介されてきませんでした(同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波書店、2010年、109頁)。そこで、本日は、新島先生が理想となさった「西洋諸国の学校」について、もう少し考えてみたいと思います。

新島先生が「西洋諸国の学校」とおっしゃるとき、1867年から1870年までご自身が学ばれたアーモスト大学を念頭に置いておられたことは、想像に難くありません。アーモスト大学があるアーモストは、アメリカのマサチューセッツ州にある人口約4万人の小さな町ですが、1738年に会衆派教会が建設されて、アメリカの東海岸ニューイングランドのピューリタニズムの伝統の主流となる会衆派教会の拠点のひとつとなっていました。

新島先生がアーモスト大学に入学なさった1867年当時の大学財務部長は、エドワード・ディキンソンでした。この人物は、アメリカ最高の詩人として揺るがぬ評価を確立しているエミリー・ディキンソンの父です。ディキンソン家は、アーモスト大学の運営に深く関わってきたアーモストの名家でした。私がアーモストの文化に特別な興味を持っている理由は、新島先生が学ばれた大学について

もっと知りたいという同志社人としての思いに加えて、エミリ・ディキンソンの詩をもっとよく理解するために、彼女を育んだ文化的背景について、もっとよく知りたいという英米文学研究者としての学問的関心もあるからです。

アーモスト大学は、1821年に創立されました。同志社は、来年、創立150周年を迎えますので、現在、『同志社百五十年史』の編纂が精力的に進んでいます。アーモスト大学は、4年前に『目|理性|心——200周年を迎えたアーモスト大学概観』という洒落な図版入り記念出版物を一足先に刊行しています。さっそく取り寄せて読みました。

同志社と同じく、アーモスト大学も創立当初は財政難で、礼拝堂を建設する余裕がなかったことを知りました。そして、礼拝堂建設の経緯に関して、詩人エミリ・ディキンソンの祖父も登場する一節を見つけました。私の拙い訳で関連箇所をご紹介します。

Amherst was badly in need of a chapel. In the College's early and penurious days, people working in what would now be called the Advancement Office were no slouches. They caught wind of a carpenter in Pelham named Adam Johnson, who, having neither wife nor children, had saved up a small fortune.

None other than Samuel Fowler Dickinson, Amherst backer and prominent lawyer, made frequent visits to the dying man. Persuasive in his pitch, he drafted Johnson a new will bequeathing \$4,000 to the College—and promising a churchly legacy in return. When Johnson died [in 1823], news of the impressively large bequest appeared in newspapers as far away as Virginia.

(アーモスト大学には何としてでも礼拝堂が必要だった。大学初期の資金難の時期に、今なら企画推進課とでも呼ぶべき部署で働いていた人たちも、決して手をこまねいていたわけではなかった。近隣のペラムという町にアダム・ジョンソンという大工がいて、妻子はなく、少なからぬ財産を貯め込んでいるという噂をつかんだのである。

他ならぬアーモスト大学の後援者であり、著名な法律家でもあったサミュエル・ファウラー・ディキンソンがこの老い先短い男のところに足繁く通った。有無を言わせぬ口説き文句を並べ立て、大学に4000ドルを寄付するという遺書を作成して、見返りとして、礼拝堂に名前を残してやると約束した。ジョンソンが[1823年に]この世を去ったとき、この素晴らしい高額な寄付は、遠く離れたヴァージニア州の新聞にも報道されたほどであった。)

(Nancy Pick, *Eye / Mind / Heart: A View of Amherst College at 200*, Amherst College, 2020, p. 63.)

チャペルは1827年に完成しました。これが今もアーモスト大学が誇るジョンソン・チャペル建設の経緯です。サミュエル・ファウラー・ディキンソンの約束どおり、チャペルには大工ジョンソンの名前が付けられたのです。

高額の寄付の勧誘に成功したサミュエル・ファウラー・ディキンソンが詩人エミリー・ディキンソンの祖父です。独り暮らしの老い先短い老人の遺産に狙いを定めて、しつこく口説くというのは、現代日本の振り込め詐欺を連想させるところがあり、首をひねりたくなるところがないわけではありませんが、初期のアーモスト大学関係者のなりふり構わぬ情熱を伝えてくれる興味深いエピソードです。ちなみに、サミュエル・ファウラー・ディキンソンの名誉のために付け加えておくと、彼は他人の財産だけではなく、自分の財産もアーモスト大学に惜しみなくつぎ込み、晩年には破産してしまい、アーモストの町から追われるように出ていき、ジョンソン・チャペル竣工の10年後の1837年、オハイオ州で寂しくこの世を去ります。残されたディキンソン家も、一時的に没落の危機を迎えました。アーモスト大学のために、文字どおり身上を潰した人物でした。

アメリカの私立大学は、熱心な人々の寄付によって運営されているということがよく語られます。アーモスト大学は、その典型なのです。それにしても、破産するまで私財をつぎ込んだサミュエル・ファウラー・ディキンソンの情熱は、現代の私たちから見れば、いささか常軌を逸しているように思えます。彼をここまで駆り立てていたものは何だったのでしょうか。その宗教的背景について、あるエミリー・ディキンソン研究者が簡潔にまとめてくれていますので、私の拙い約で関連個所を紹介したいと思います。

As the eighteenth century drew to a close, religion in New England had become increasingly polarized: the liberal Unitarian interest centered in Boston at Harvard; the conservative Trinitarians . . . were gathered in the west. Harvard's defection from the faith was formalized in 1805, when a Unitarian was appointed to the Hollis Chair of Divinity. Standing against Harvard were staunch Trinitarian bastions of Yale, Dartmouth, Williams—and, eventually, Amherst College.

(18世紀が終わろうとする頃、ニューイングランドの信仰は、正反対の二つの方向にどんどん分かれ始めていた。ボストンに近いハーバード大学を中心としたリベラルなユニタリアンの関心を持つ人々と、西の内陸部に集まる…保守的な三位一体主義者の二つである。伝統的な信仰からのハーバード大学の離脱は、ホリス神学部教授としてユニタリアンが着任した1805年に公然の事実となった。ハーバード大学の前に立ちふさがったのは、イエール大学、ダートマス大学、ウィリアムズ大学の揺るがぬ三位一体主義者の牙城であり、アーモスト大学が最後にこれに加わったのである。

(Cynthia Griffin Wolff, *Emily Dickinson*, with Foreword by R. W. B. Lewis, Perseus, 1988, p. 15.)

18世紀終わりに独立を達成したアメリカは、新たな国造りに取り組むことになります。そこで、大学の役割についても新たな動きが出てきたわけです。

問題になったハーバード大学は、皆様もご存じのように、アメリカ最古の大学で、現在では誰も

が知る世界有数の国際的研究大学です。しかし、1636年に創立されたときには、植民地の聖職者養成機関でした。アメリカは、17世紀には未知の辺境のイギリス植民地にすぎませんでした。わざわざ大西洋を渡って、優秀な聖職者が次々に来ることは期待できません。そこで、自分たちの信仰を守るために、自分たちの牧師を自分たちで育成する必要性が切実な課題になったのです。その使命を担って設立された大学がハーバード大学でした。

ところが、独立後、ハーバード大学は、近代化に向かって、いち早く大きな方向転換をすることになります。その象徴的な出来事が1805年の神学部教授の人事だったのです。伝統的なキリスト教信仰を守ることを使命としていたハーバード大学が神学部教授の地位にイエスが神の御子であることを否定するユニタリアンを迎えて、大きな物議を醸すことになったのです。

キリスト教信仰において、合理的に説明することがもっとも難しい点は、人の子イエスが神の御子キリストでもあり、父なる神と御子と聖霊がひとつであるとする三位一体の教義です。そこで、イエスは神ではなく、私たちと同じ人間であり、立派な行いをしたことによって神に格別に愛された人物と考え、近代科学の勃興の中、合理性を何よりも重んじるようになっていた近代人にもわかりやすくなります。イエス様のように神に愛される立派な人間になりましょう、という教えは、ある意味で非常にわかりやすく、学校の道德教育などにもなじみやすいものでした。十九世紀のアメリカ東部において、イエスは人間であることを主張するユニタリアニズムは、ハーバード大学という強力な知的権威の後ろ盾もあったので、急速に広がっていったのです。

ただし、信仰や教育という人間の心の深い部分に関わる問題について、わかりやすさを優先すると、得るものもあると同時に失うものもあります。ニューイングランドの信仰という地方文化の伝統が失われることに対する危機感が詩人エミリー・ディキンソンの祖父などをアーモスト大学設立に駆り立て、伝統的な会衆派教会の信仰を守る人物の育成の基礎となる大学チャペル建設に異常なまでの情熱を注がせることになったのです。

この同志社礼拝堂の着工を祝って、1885年12月に開催された定礎式の直前まで、新島先生は1年半にわたる生涯最後の欧米視察旅行に行っておられました。母校アーモスト大学にも立ち寄って、学長になっておられた恩師シーリー教授の卒業式説教をジョンソン・チャペルで聴く機会をお持ちになりました。新島先生は同志社英学校の校長にふさわしく、英語で旅行日誌を付けておられます。帰国の半年前の1885年6月28日の日曜日には、シーリー学長の卒業式説教の内容を書き留めた記事があり、「キリスト[一語判読不能]霊的世界——キリストの内にある霊的世界の愛の啓示の法」(“Christ [one word illegible] the spiritual world—in Christ law of the loving manifestation of the spiritual world”)と書かれています(新島襄『新島襄全集』7同朋社、1996年、251頁)。シーリー学長の説教は、キリストが神の子であることを否定するユニタリアニズムに対抗するために、会衆派教会のもとで創立されたアーモスト大学の学長にふさわしく、キリストが単なる人間ではなく、「霊的世界」の神でもあることを強調した説教であったことがわかります。

本日、司式者の方に朗読していただいたヨハネによる福音書3章6節に続く16節は、新島先生

最愛の聖書の一節として知られています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(新共同訳)。この聖句は、イエスが単なる人間ではなく、神の御子でもあることを私たちに教えている聖書の言葉だと新島先生は考えておられたのだと思います。

現在、アーモスト大学のジョンソン・チャペルの演壇の壁には、詩人エミリ・ディキンソンと新島先生の肖像画が並んで飾られています。エミリ・ディキンソンの詩は、わかりにくいことでもよく知られています。現代社会においては、わかりやすさが求められることが多くなりました。知識の開放は、近代民主主義の基盤であり、わかりやすさを求めることすべてが悪いと言うつもりは毛頭ありませんが、わかりにくいけれども素晴らしいものもあることを忘れないようにしたいと思います。私はディキンソンの詩に向き合っているとき、そして、新島先生が「同志社の基礎」と呼ばれたこの同志社礼拝堂を見るとき、わかりやすさだけでは測ることができないものもあることを忘れないようにしようと、自分に言い聞かせることにしています。ご清聴ありがとうございました。